



TITLE:

地理教材としての地形圖(第二輯):  
六、奉天、東亞輿地圖西第三行北  
第二版南部

AUTHOR(S):

藤田

---

CITATION:

藤田. 地理教材としての地形圖(第二輯): 六、奉天、東亞輿地圖西第三  
行北第二版南部. 地球 1930, 14(3): 220-223

ISSUE DATE:

1930-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183807>

RIGHT:

同様な議論が、横側に於る地層の變移 (Lat-  
eral variation) にも當嵌せぬ。

地層の厚みの膨大縮少 (Thickening & thin-  
ning) が、一定の割合で斷面線上に起る場合、

補挿傾斜の構成法は半徑より半徑迄と、層位を  
連結するに用ひらる。

然し各々の層位に對しては、再び異なる構成法  
が必要になる。(未完)

## 地理教材としての地形圖

(第二輯)

### 六、奉天、東亞輿地圖西第三行北第二版南部 大正十五年製版

本圖は明治四十三年版の古い東西輿地圖とは  
全く違つたもので、面目一新の觀がある。その  
周圍は吉林、白頭山昌圖、旅順の各圖幅である。  
これらと合せて見る時は明に滿洲と朝鮮との交  
界に於ける様子が瞭然たるを得ると思ふ、勿論  
スケールの粗い、百萬分一といふ輿地圖である  
からこれを Topographic map として見ることは  
出來ないけれども、この方面の比較的信用さ  
れるべき手頃のしかも唯一の地圖として之を讀  
者に推奨して差支へないと考へる。

本圖幅は平安北道義州の一角と遼寧省と熱河  
省の一部とを含み南滿洲の指掌地圖として最も  
要領を得てゐる、滿洲の地體構造線たる北東南  
西の褶曲軸(北四十七度東)は南の方山東から  
南支那地構造線に延長し北の方アムール河の下  
流に達するものであつて、所謂長白山脈と稱せ  
らるゝもの、本圖幅に於ては東部山地として現  
はれ、始原代の片麻岩や前寒武利亞紀の珪岩な  
どの高原である、この高原の西を限る第一の地  
構線は斷層線であつてその西の方には蒙古高原

の邊縁をなす、全様の斷層線があり、中間に南滿洲(遼河平原)が展開して陷沒平原をしめしてゐる。今この南滿洲平原の東西を限る二つの斷層線を延長すると恰も吉林附近に於て會する、その會點には火山岩の噴出があるのも當然である。滿洲には右の古い二つの構造線の外に殆ど之に直角に交はる北西南東の褶曲があつて黑遼分水嶺といふべき低い高地をなし洮南から東に向つて、長春と公主嶺との中間を通り長白山脈の北端を過ぎて白頭火山に達する、この新らしい褶曲によつて滿洲は北滿洲と南滿洲の二大平原區に二分される、水系も亦自から渤海とオホーツク海とに分れる。全時に長白山古期地塊の東には鴨綠江圖們江を連ぬる一の斷層線があつて現に滿洲と朝鮮の境となつてゐる。しかし之を歴史に尋ねると滿洲の境界は全く前記の二つの北東南西の斷層によつてつくられた連嶺と、北方黑遼分水界なるもの、つくる自然の區域が有力に働いたものであつて、渤海灣の北、遼河の平原は春秋戰國の頃、既に燕趙の移民地であつ

たので、之を遼東といひ、華夷を限るためにこの平原の西の高地に於て北東南西の方向に邊障がつくられた、これはかの秦の始皇帝の萬里長城なるものゝ、山海以北に延長する原因となつたものであつて、これによつて烏桓、鮮卑、蒙古などいふ高原民族の東下を防いだものであつた次にこの邊柵は更らに北東にのびて開原に至り河をこえて、今度は長白山の分水嶺を南下して鳳凰城をへて安東線の附近に達した。明代にはこの邊柵の外に今の滿洲族や蒙古の林丹汗の如き強大な民族がゐたので之を守備すること殊に嚴重を極め、山海關より安東まで二千餘里遼陽瀋陽、廣寧、開元の四大中心街ををき兵士を屯して之を守ることにしたので、さうした警備の地が今日も城下町として榮えてゐるのである、戰時とはともかく平時には滿洲人や蒙古人が出入するのための門があり、そこで牛肉の市を開き貿易を行つた、例令ば撫順は滿洲とのさうした貿易地であり、西の方には、彰武、清河、義州、錦西などの互市場が發達した。

滿洲が東部山地の興京に起り、柵をこえて瀋陽に入つてから形勢は一變して遼東山海關外の地が滿洲となつたけれども、西方の邊柵を限つて蒙古の領であつたから清の太祖は開原から更に北東松花江までの間に柳條邊牆をつくつて、蒙古の鐵騎侵入を防いだ。其後清朝が全支那を支配するやうになつてから東の邊柵と鴨綠江との間は封禁の地として漢人の入國を禁じた、朝鮮の方もその國境帶は之を無人の地にしてゐたのであつた。光緒以後それが止んで東部山地に漢人が移住しはじめたので、今日では瀋陽から輝北に通ずる遼左の地は將に滿洲の穀倉といはれる程に開けてきた。全時に遼河の平原には所々に沼澤地があるけれども、これ又人民大に増加し一大農牧の地となつた、のみでなくもとの蒙古土默持の土地さへ滿洲と全様に支那人の開拓地となつたために、愈熱河省といふ省名が出来て支那本部に屬するやうにかはつた。

山地だといつてもスケールが大きいから農業地の面積は廣いのである、滿洲勃興以前には古

くは高勾麗の地であり渤海國の土地であつた、撫順の炭田發掘に際し高麗燒の硬質陶器が多く出土することによつて過去の朝鮮人の活動がしれると全時に、鴨綠江の右岸に於て、もしくは圖們江の左岸に於て所謂間島の地へ、今の朝鮮人の進出も亦久しいものである。従つて滿鮮の交通路を見ると城、鎮、廠、邊門、關屯、堡等の地名がいかにも多く、いづれもその軍事的由來を忍ばしむるものが多いのみでなく所々に山城があり警報を傳ふる烽燧臺址が残つてゐるのを見るであらう、蓋しこの圖幅の東半部は古來民族の興亡消長に伴つて、國境帶の最も不定であつた所であるのも面白い、しかしいかにそれが不定であるとしても結局は地構造線に伴ふ自然の分水界が永久に邊柵地として形をとどめる所に地形と人文との交渉がのこるのではなからうか。

最後に一言したいのは、山地に聚落の多いのに比べると遼河平野の聚落は比較的に少い、これは土地低卑で、飲料水の影響によるものと思

はれる、二十里堡、三十里堡、二家子、三家子八家子などいふ地名は交通路の上に出来た聚落であり鄭家屯、萬家屯、王大人屯、徐家房子などいふのは、さうした姓をもつ移民の開拓の跡であり、田水井、七水井、大窪などいふのはや

## 伊太利ところぐ (九)

はり飲料水が決定した聚落であることを語るのではなからうか、一枚の地圖についてその地名の起源をそれ自身の名から考へるのも面白い試であると信じる。(藤田)

### 瀧川 規 一

【ゼノア雜感】 既述の如く東洋人の吾々には不必要なるアメリカ發見者コロンバスの家を見、カンボ・サントの墓地で伊太利の愛國者マチニの墓前に額づき、墓域内にある數多の彫像のエロ姿グロ姿の説明を面白おかしく案内人から聞き、ラヌンチアタ(L'annunziata)の寺院内の天井の繪、壁の繪が美麗なるに讃嘆した。それもその筈である。院内をいくつにも區劃した側壁の禮拜所の正面の聖畫は十七世紀のゼノア畫派の代表的なものであるからである。繪に

あるマドンナの美しき印象が未だ消えやらぬうちに、日本婦人かと思へるやうな年増の肥大した二人の婦人を見た。篤と見ると二人共上ひげを黒々と生やしてゐる伊國婦人である。これを見て日本婦人にも口ひげがあるかどうか今日まで迂濶であつて他人の顔をよく見て置かなかつた。歸國の曉には必ず見てやらうとさへ思つた程に、マドンナとの對照の餘りに顯著なのに驚いた。寺院(Duomo)の横薄暗き處に佇んで行手の地圖を擴げて居ると一人の娘が詞柔かに呼